



文化  
校正  
梅翁  
癸句集  
全





序

當流乃始祖梅花翁宗肉誹諧の何や  
あるも紫よ其香がまをぬ湯春のなを  
見せし八實文延寶の以也坊翁けめ西山  
豊一とて時乃肥後彦井藩中八代の加藤  
正方小属一文種よはけくもおほえそを  
かよ實を永九年大守とてこの有とて  
武川を道きなり雲水乃行方小より皆んを





是日のふらふらとてふとまじひ伏見の  
寓居せしむ湖東乃縣の邊にやせま  
をこかゆ縁にふかきまのし君らからん  
いしはよきと金ま地と望みの命と  
空ふせき梅のり山あり河を首  
然りて塔又東風よ吹流とまきとや浪速  
江の河まあふ杖と曳の天満の靈社  
岩縁ありげじ正保乃け免嘗れやふ

漢の住所を傳へ空ははるね秋乃  
まといつゝしよ 神古路ふ叶ひ  
小松南枝よまけ何とてまき北窓小雪の  
力を添へて後世の圖とて人れく昔妻  
路もくとりとやとまゆれむじなうりめま  
さうりて武陽ふらりてい詠踏乃詠林と  
むらきと世俗の眠りを世覺させぬ路よ登り  
この同徳本寺と建て東派北高量成



ちよりの年々感感たるは老後  
 吟詠乃秋風名風哉と乱さるる事  
 大櫻の陰の中と持揚梅の一向小を  
 因て世と連歌不終る貞享子之縁の同中  
 一多り一は叶緒書ふ我祖翁の巻を  
 筆向成哉さる稀也はさるる詠句の  
 徒活潑のしひ流る自の稿おけきき  
 早の河邊の氣さるる数とやめやる

此まといの甘白しをさるる  
 日乃まき成約の園ある探り書事  
 ちよりの年々感感たるは老後  
 吟詠乃秋風名風哉と乱さるる事  
 大櫻の陰の中と持揚梅の一向小を  
 因て世と連歌不終る貞享子之縁の同中  
 一多り一は叶緒書ふ我祖翁の巻を  
 筆向成哉さる稀也はさるる詠句の  
 徒活潑のしひ流る自の稿おけきき  
 早の河邊の氣さるる数とやめやる



花のまゝある時と待月成りし  
満花乃さりとて梅へ心と志の影い  
侍る也

江戸俳諧林七世

一陽井意外述

安永十年辛丑春

梅翁宗周發句集



春之部

歳旦

新春乃まきよハやまきま茶が  
まの年のがらとていお可也  
おもろやけきし初折乃まの  
のまゝ海く初まきま年始の



歳徳やき身物けふ己年より  
なふふ我津國同はむし  
古歌に曰ふとせうと申るか  
稀なりといふ老古をなす  
かきろめや子孫播及大杉原  
出せぬや多く徳年と云ふ事  
書初や行年七十攝列の任  
老なるいふ事いふかつてんかむ

七十何れかの事母れ  
家よりいふ事いふ事綿やま  
おろしつる箱徳い記乃松飾  
まやせしはな事ある百年  
初まのまの貴方ふ向ふ岩峰  
子日  
おろしつる箱徳い記乃松飾



梅

よみのと一雨

ふきとる元日

梅北とか 流布

浪速津尔はく夜のあや花乃矣

早しうり宮とていふまゝと字女叶也

梅さくやめばふあうり乃秋葉碗

いふはらりぬると告こころるふ

ゆくい白ふ梅や自为れとる何とせ

江戸祇詣談林めて

はまはたふ談林の木何り梅花

主生を神乃垂倉らるるめて

梅のまれ山んくもくくぬふまか

花 櫻

ちうさく急んかふ是ハもや

江戸と以鑑とも也花一掃

武蔵中野はさうちくまことと名酒

おきき花ふつらゆきもた社々夕嵐



花や春宵一刻の形  
ふさぎ一語一いんせきと存ト  
たのけろと志うき一柱たおのた  
くき深しのや飾る花乃神  
淨瑠璃の泣くま一のやふのな  
かつあまこととく横小舞い花の宿  
たまはらじよがき存じしとれの家  
さくく人き存とハテ戸舞の神

古き能日見くろけおささう  
たまきふし佐夜の中山ふ乃登  
河上やま前乃楊柳肥前れ花  
申くもか魚と旅とさおろ中み  
つふ坂乃せきこととけ花見か

奥列へ事なり

舞ハ谷の花ふ谷たろれき雲い  
世れ中のもたハ幡をさう風



疎梅のかえとつけ梅如と

名のうら若年の人東乃喜ふ

卦ふをさるる 下畧

かろきものねら丘眼さ乃江戸

お免りとおふさきと信西上人の

初とあふ

たのむとて花めいと一頭乃骨

金籠まゝて

花いちり寺はふんさうまゝか

讚品興昌寺宗鑑法師之旧跡

一夜庵再興御進

さう何ぞ聖ハハ川まも一夜庵

追善

何ぞとて世力奉願此等の友

花の時の腕へ生れ結ふらん

是ハ俠者かまの作也於再築はるま  
よー後とれいん



法善妙満寺ふ妙ふふふふふふふふふふふ

更々又治れとふふふふふふふふふふ

伊勢

法法坐る床めつと也伊勢

小町像

おことつら風狂乱乃姨

当世の風体と手と思ふ

かゝる新く治るくか

耳ふふふふふふふふ

初學お人ふふふふ

むふふふふふふ

今法くもや謙倉宗

かゝる強ふふふふ

胡蝶

世の中や



かなたの蝶々籠乃昔とらむ

混雑

うら風や折しも地引のいろ乃不  
筈よ入まの望浦へつらと申  
うらしいまの去丸ふらと  
うまゝ種く世の宿かせ

小伯漱や眼鏡も金は乃ある  
たのまねや一本笑一松のも  
引くけ九布マに荷新乃能

涅槃像

あらかとふふ物あるか  
神の道ふなる事さ一井む  
松葉蛸ふのほるきあ



夏之部

杜鵑

心もかくしやる古く奉りまは  
音明らゆづ残るかゝるを  
枝字ものかゝるれ傳しつる  
子継まりしら深らるる  
まのこゝきしやるい証郭  
ほらるるまの夜將かゝるら

茶藨屋心んまはかゝる

やとあまきさるめしよの在自  
活あららるる

かゝるる鬼神心惜まは

容るるまの奥ふ

蜀魂をいひて夢乃落向ふし  
人あまらるる日かゝるま  
はまを我し<sup>ま</sup>七十一なとふ



海舟踏ふ

かきくは右のやあき乃内たの

新樹 木草の茂

先生乃夏一二本まき足あし

草花腰一茂や十園子

三ヶア、ゆく草津の姥や隣る情

備前の一時軒方板住庵の初舎ふ

わーくしとまきを茂き経海の住

まきまきり物修せし

ぬきんまきり母獲屋る茂きりうあ

ふすまきり田なまきり

清りア、や朽葉といまきりハ夏あま

夏日 経海

こゝろあきけきふ家小明石海



東玉めくりちほふ帰るるし

夏山や武を踊ふ所や見ぬ

たるけ夜や吾妻と折ふ月西

亦多結

夏はるくは痛けぬけ枕屋風を

如雲

あつとやふんたゆへいふるを非

若火し百々ののらふとよめつ何

ほつとまへとまへ今豊盛のころら

家よ一夜に尻さめる火を山か

世ら者なつたけもあつた

ふく風は楕原は定めきつこのか

人麻呂の御教ふ

清筆のたまひぬると定むるい



扇 團扇

不長や扇おのち道是を破る

扇と谷は京原あり

谷くくや此意前海一ニーもち扇

何ふけくいつくおま地なうら素扇

納涼

江戸庭や戸さぬ吉代戸さぬ吉代のタイニの下納涼

津の玉乃こゝかゝ涼ーむらひ母

兵庫あり

か片松や和田いおなきふ夕納涼

藻倉あり

山乃内やあ上杉の下納涼

金岡筆捨松

まきー休やお見いと筆捨松

田子せき



やう涼—富士の磯の波の音

粟津ヶ原

かけらじし松原の—と露目

公太

とく繁い

ふたむ襪園梅—むらかりし

祝儀の—は借くはる今より

一日く吉為了磯を也—うそ

上野めえ

清の—や民乃—さるは

八橋—

まふ字や—は—申へ公太

清水

あま—の—は—の—

手拭乃常も—の—清の—



混雑

けししと夏ききししと書らるる  
もちふきゆら沙糖をや

筆吐一寸のまきいふ尋う那

堰田肥前う望みぬ 是れ乃肥前節之  
今叶豊竹堅ふら

善行乃糸一毬やうき母ふ

や何とけくく多うかぬ尺釣籠

留別

入相のうね沢志とくく

船桶やなまのどひる存乃る

何代をま 昔のイニ ね葉ふ雀う固

安部市 のイニ やいばまの人を夏紙子

あけらふ大鍬屑ほふ夕アうあ

なんせもや楊梅の核むうーは

本新東安樂寺の

新地ふしかくおもの後梅乃核

はまぬら老れうひにむらら



ふじのふしりかきや帯き紙幟  
五日雨の日にしるみせの秋作を  
石山沼津の屏風多のしり  
命なるも湯た中山香藁散  
夕の涼きし海ら海乃ほの虚見か  
こまきし語

みづしりかきみふの音あけ十圍子  
人道の痛とこたえしりかき後河

秋く部

ま秋

まきふおとふもしり高る紫は  
紫爺のりかき葉は夕昏に月の秋

一葉

秋やまのふしりかき一葉舟  
頼船と見申るふしりかき舟



七夕

天の河原に遊ぶこの羽根も星の妻  
月のやまをいづる星もわが恋

躍

かけはんとこのやまの踊り  
とらふやあなをかけむふ  
躍子にかきし秋乃はらし

秋扇

夕書しつるはらは扇の那

西本願寺ふて

西風や何より自力乃扇はき

西の風一

秋

かみかみのまきと只まね秋のおみや



昔の秋昌次小対一々

皆人の秋を秋としふ長くは世

空に雲はつらと折る

江戸小旅く見し露も落葉もを記

追善

少り何に玉叶もなれ秋葉碗

稻

賤屋まぐ秋はしれ葉やと来る限

和泉國万所より山雲ふすりて

いふえりる雲や泉列万所樂

芋

いそしく先夕とさるる今宵は

者もく下高野山とさるる芋



露

あつら露やまらふるまゝとこら

高野山まき

露乃母や万葉れは別奥の院

悼

我とちぐまはるまがさるる神吐露

一時軒の母身はらるる時

いづれさふのまらぬむじ露の神

露

風へのる川音静言津舟

胡きりふ海らるる海辺の那

らのく露の音まらるる胡音を

高野山徳院まき

音まらるるハの棟はらるるハの吐谷



角力

勝相撲淡島羽衣とせきさくらや  
お角抵よ谷のくはせし二瓶の舞

やあゝ二

雁

今えんといひハるれ料理が  
池田村おて

一啼く葉屋の何もいれさるんを

鹿

たれしいる奥ろゆか申るかいらとて

紀列あそ

うらけの筆控松や——のき



月

日下金分曹一可人かげ好  
いれく家と曹の月一輪  
な人や古きを以日月色  
月弓や徳名ハ秋ハ羊乳  
始終去れりふ雲七乳し  
けりふなこらうれ舞や入間  
坊久ハ何を河漕うらハ日

日下いふ子賀ハ位電力満し  
其れハ海江ハさまハ坊ハ三井寺  
紀の玉河あり

大師の秘をみりかぐハ  
紀別後代の法坊ハ市所ハ坊ハ  
一見法時係家ハ坊ハ市所ハ坊ハ  
月のおやまハハ半時法ハ坊ハ  
在明乃法事ハ坊ハ市所ハ坊ハ



薄

いろはにほく牡丹形なる薄は  
登蓮の葉とてよく見ゆ  
十はまきとては必見え

紅葉

中定り（表外）の葉は増す  
酒一木ぬり九りはくし

此句ハ酒廊みづのあまじ

紅葉

錦手や伊方里北出乃薄紅葉  
ももら耐かる所や、ゆめ橋

紅葉ももらの西

妹ハももこれ紅とかま

自照書  
つるのいさく右乃もも秋の葉とて



種日秋夜

碓屋唄酒厨く此秋夜夢

ちるのなる唐茶も秋乃寐覺か

何價ありの價何れ雄鷲此秋の京

不乃秋久安寺とい谷をり

七世ちふ城ふ絶の山くかけりきて

那智高野中ふやらり老い年の秋

善乃浦めあ

片まハ秋の事何さしと浦乃秋

常陸へて

京へてりといとるく秋乃日高寺

西行像禱

秋ハ此法師まかこみ夕アうあ

漫雜

峯入るまも草鞋此旅路の家



かろ夢小なくハ夢うふ虫ノを  
まろしくハ花ノ口ハ女吊花  
香る詞乃氣ハハ花や蘭  
多路行山路申き見侍至野外

兼好像賛

少中火也はましく華は花はら  
やろく思よ棒うくこと世に母言ふは  
まろく木ハ紅葉ハハハ花葉梅

ある系堂也

一系ハ先<sup>花ノ種ハハハハ</sup>穂ノハハハハ  
伊丹村ハ花堂火とて七リハ四ハ  
稲花灯ハ花と也ハハハハハハ  
系<sup>花ノ種ハハハハ</sup>花ノ種ハハハハ

天を酔ハハハハハハハハハハハハ  
呉服社

ハ翔や二ハハハハハハハハハハハハ



穴織社

紋々々々或いふもさへ何れとてさす

大坂乃警花

侍中とて心よりハ隣れ堪外

新酒のあそびをいふ不明石茶

松葦ふ相中生れ右のり滋織り

きくめあそび乃西南より秋翰

紀別院東田跡子孫住家あり

あそびをいふ乃は乃也殊るん

九月十三日室町市小清

住吉乃市大正乃入るる







霜

宇治あり

里人ろくろり人金橋乃霜

紫衣の女ばるとりるる谷小あり

葛叶紫のおはらうらうらと夜に霜

越思講

平家守ふらふらとせら橋わおあり

雪

あいにほくぬまの雪も雪は

たぬらととさと積りてさきき

雪は松曾根とくま谷所うら

田中へ雪はしらとくまのふ

くちらふて朋友ふあふらふ

こまにやまありらに雪はな

宇治あり



去秋と人いりあせりし雪  
万句雪乃顯遠國より伝ふ  
あゝと云ひぬけやいとう雪祿

鴨

鴨乃足は流きもいそあも此か  
かきつらうひり料理のまじり

混雜

宇治橋乃神也系社公所はく  
あゝ系空をて

庭の落葉其外か申き取れし  
あゝ系空をていりともて申く嵐  
志ら翁乃夜のまきりやわたり解  
さゝ風ふよとい枝嫌や伊勢神樂  
よむとていし人丸はら申き玉電



あはれもたれし一かゝる

常事

於とらけの念佛衆を常事  
さねきふふりて

歳暮

一日のたまたま

あはれもたれし一かゝる

あはれもたれし一かゝる

あはれもたれし一かゝる

独吟十百負ふはまふなり  
申急

あはれもたれし一かゝる



校合

島津富

山内花縣

常木丹

<sup>二</sup>益舎左簾

再校

高木雀郎

梅翁祭句追加百十二章

春と部

庭訓小下のせりぬらふれ

相生乃陽よむふやの春

あふれし何る年毎乃らるる解

強直

けふも門は春といふるを

六十世の一日

十六世の文字かゝるる



あゝ人乃のんかき〜

冬もはほろろ梅のよけ

風葉の人のまじりぬ

咳まけふ雪のしる折梅花

顔をしる柳を折基甚菩薩

しつるまきとら吾妻のふしふ

風便やふちか人乃より山

のいしきれむ折あとのい

智仁勇徳勇と題し得〜

かん其其の海く〜ものせき見酒

物〜乃人し待らり伊勢橋

左風や東西〜江戸は〜

明〜

い〜見人磨の眼よ梅朝

信濃路乃弱いまわ〜木乃洞

富士の雪を里裾み〜まけ京

日〜〜入るる〜匠〜洲田の橋

田市〜〜人橋乃〜



つふ折やむらひきく人春の約  
里人を相まひとさるや独活蕨  
秋乃佐ぼりかね乃井れ蛙の音  
独吟の音

晴るも雲より好らるる村花

つふの心はなごころ

まかきまはしたる東乃日記の音

内藤家世居るふかねくさるこ

あゝ〜となくたはなぬおの母

お便直やのりふまゝな及乃陰

夏之部

伏見西岸寺あへ

藤道具といかたせやらや更家

まふらつを枕しうま〜郭公

いつかの手をほふまふ子親

ま〜ま〜人よあひし

其後や何事〜先ほ〜



江戸高野幽山室めく

谷とよけく一江戸勅めよ杜宇

松山政也追悼

とほくよ冥途乃道の記鄭る

明石めく

柿乃めくましくなる和歌集

京惣本寺控林へりはく

東岸ま守武流義徳本寺

黄檗山

一山乃祖たろとけまる苔れ下

秋宿の谷よあ説あま

赤沖五井のくかき路鳥の赤林

江戸めく

云叶集あ前る一もり長者町

日菴堂仁口の書

およはふかゝる時きや葵草

前る一もりあえれまき

おのびや蟬乃よ秋宿の園



ゆつりしよよ筆捨松小蝶の吟

人の新らふ

かくもあらふかき老をらるる宵は

は戸一ひをたらふ人の事も

一わひと百乃味一守とらるる加子

先世も向はるるに有へく

たもいしはるる紫叶もり

梓谷ら中ふもりや紙職

日本よ我等とるる田唄

三吟

若中乃筒いしをををを

少年への挨拶

吉合點を世にのゆれ

ふとやまゆかく浮世の車百合

黄檗山

親折をから授ふれよ

小西似春無行

まん川東次南や夏坐鋪



かゝる系社志をよみ半し夏夜を

江戸めく

芝といふもたはなはりし

夏風は清く清くあつとこのまゝ

清く清くあつとこのまゝ

屋列文のまゝめく

舟は七里の舟は夏月

鎌倉一見く又東海道あり

明やまゝ夜日とり也小破者

箱根乃系屋

焼豆腐をくくくはつき有ら

くく風し入るくめらん乃扇の相

右の酒系さまはいたりあまが

江戸めく天孫氏新屋

清く清くあつとこのまゝ

大井河浩あの時島甲やちて

川越の富やちりものな夜酒

石山くまゝしきくひれしき



涼風や松なるく小石の河

江や七面あり

涼風の教や八乙女七柱あり

日向所新浅坐あり

まゝ風や吹出ると天下一貫文

日取や高野大徳院無行

いと涼しく大と色とり法あり

あるは方あり

時得らるる仰り下まきみ

字治無行

去る新し涼くや此の風

六月十日音系入

祇園會乃山路より大津駕籠

あり人乃無行

よ此紫より山ありを玉の汗

江をり登らん心あり人あり

台慈を秋風を森乃草

茶君蝶くころきよ撫る山の皮



夏草の泣麻乃の葉をさす女纏

秋之部

大坂出船乃人

追風の一葉万里いづ乃帆

七夕

人間のふら井出か入星々の光  
空を定火々おひきくしきこねり星  
をくらゆき流るる照天乃姫小秋

常陸神也彼蓬生たま乃秋

八朔一紙秘義をうりたる也

天王寺めぐ

彼岸はらら秋八月十六日西よのま

月白き鳥ハさかしく墨田河

有明乃はつき一松島物さ刺

りハ空叶まら流らめら二八月

秋よたのしみさくら花を月一輪

月ナハるるいづくせき集と春のり花



岩州山田月讀の森月次云々  
日よくらむむも一懐常神  
厚不傳入白河一書二所乃實  
まれば著乃申の同くまもも謝  
三箱乃佳湯

姥鳴もまひやさしく姑湯を  
松山以也新室

やうめく新秋樂く八松の考

みま部

屋根や時雨谷深くを耳造し  
かへ徳や落葉枝ふのなをりふ  
志ふ梯れこのも徳流や深島衣  
隠者の所らふ

みま部へ隠逸傳乃に羽之衣  
様留るる

行客乃跡とくひむ置巨燵  
我まむと書は



小家なまきと膝と申す所の巨魁  
池田炭や名の天下の炭より  
みま揃へ一よみとらや炭俵  
勢舟朝熊山金剛證寺より  
高小まきやと申す炭俵より  
日新下山乃折らる雪よりけき  
坂より菅井小笠やと申す  
日國久居友室家めく  
其らよりとらけり山領れ雪

男山乃麓に入道一人を訪  
雪とさうと落とる昔男山  
玉ありとけり玉ありま  
伊勢乃津一室  
少くか入伊勢の津れ玉友衛  
月よとらかけや大も大神樂  
酒屋めく  
奥深き此の情より定はる  
氏乃家も又あはれ也



奥列岩城ハ幡宮法樂

さし折を言ふ主人や蜂さし

あそび小打こゝろ年や雪礫

三十二年忘子句

かろふまゝ親指を〜と此書

新巻

春を〜子世あ〜〜電子首

天明元年辛丑首夏

梅翁祭句拾遺 百十一章

春之部

就中市代や延表乃か〜解

是らう尖叶者若恵比須〜

とら懐柔のおもて向へ神叶書

年号か〜〜元日か

明曆々梅叶新系記〜之侍日

門司の舞

書らめやも〜志向い乃実硯



立春三日なるるふ

立春ふ二日路をかし午乃と

版野めく

骨を推吐紫をはいひせぬ

大阪豊後屋又と兼無りふ

い休子とし大空しとと豊後梅

去年の梅折を隔ひる懐命が

六日道頓堀日興

多きまよ習いさからからなりぬ

歌波戸や清きまをくみらむとあ

くまを海乃貝なる愛むし目乃薬

河部川めく

あや川乃まの珠や古紙を

遊女重寶、言葉書あめく

霞をけはけれ大と大幸お給

千句巻路ふ

お松をふい申ふ寺とらるあ

是叶下あしあふとむるかなと名あはし  
あのかとらき一現きくし

埃を濁を款乃流まじ蛙のれ



啣子ハ百鳥の子乃懐帝可南

左音子具利房無終小

言吐紫や松のこら吐着其主

明石一

帰らら兵庫へやら天津宿

塚

三月乃三日やさあて汐干

住吉

筆をいあまこ頭の海邊は何も

ぬまのもしあて盛すふま抵乃酒

鶏のやせを右へそりて退かぬ

花乃滝やむらひる何らく太山奪

方由同道あそ京社をいふ忽ちるまら

何も詠ふ持力ぬま是見外

石翁乃白古やまじ花吐雪

およろむじらぐ徳刺の家梅

毛鹽と地主乃梅まきくい海し

柳さくら都いよまけまあふのち

廿日草さく四五や夾の妙



夏之部

おのむじく本宿かけよ杜鶴

富士の根を山杜字とひて由短冊は下の  
仮名一字足元  
次

行平乃古秘義をかや鄭ら

はなは淡由あへり本宿よ次

一都の信田松をかくまを

松作をいふ世よとを蜀堯

悼

子親は家よりなるのハ松中

向を云ふの案とらつ田長

短冊新らふ

何との赤生を文字をかまはる

行平乃古秘義をかや鄭ら

はなは淡由あへり本宿よ次

一都の信田松をかくまを

泉別助松

校よりもたしむけ松乃長

小田倉々植をら海し長興山



公寺也

たまきとりの月不はつ乃み露が  
五月雨や天下一救うもらむ

島田よとあ天よとあらふ

夏川や銀峯の露ふとあら  
河越の宿ややうもの一夜酒  
夏懐をええ隠ころはらむ  
庭風や吹まら坪乃下まらみ  
三島よとあ天よとあらふ

宇多の草をばらむ人のも

大和宇多の根や同言  
八幡の男むまの石清

糸をむらむの祇園の  
夕まの岡移ふる

申やらけ同利の山乃あ  
方由母監

来原乃井蓮の



秋と部

秋を起きて西唐風也虎乃勢

盤余野

さきハ秋と申いれは野邊下  
秋のそは浪集江射ハ伊勢ハ醒

二見浦二句

少らハいつき淡秋蛤二見溜  
同ハ玉ハ清き渚の月見也  
待月や首長にして雀の園

明石湯多勢きかたの月見也

人あまり伊勢物後小次月

さき影く来ハむさし遠小登

月夜はしきハ指ハ無光この漢

りの影やきらく先侍頼源氏

古書也

月ハ家也遠ハ一見ハ我らまら

道公者ハ書也

月出く一燈ハ深し谷ハ庵



長りし大なる雨一十二夜

適昭僧正あきあきの御書

馬上もたまはるる御書は世に  
天小あらは地よなき言ひも  
雲草も言ふ雨の晴間も  
さきよし深草山より元  
河津池乃文字を携へて天津橋  
西國の病人幸後あきあきの  
よき御書も可なり花も

連歌集も亦哉嫌ふ様う  
古酒いあまの麻地待て  
きりくは夜更に

朝態

初芳く前よ海上まへ

室陽むろひの

花ハの歌いまも

伊丹いたん

此里へ接乃所此下



對馬紅葉山

古酒宴をう紅葉山といふ名をう

宇治めく

さしはさう大草れ紅葉と落葉をう

海はらううを泊舟をう

船よりくや美原は秋のまら射

ちきりめく

秋の代木や深きまらけり

淡橋や落くさんめり

淡橋や落くさんめり秋のまら

住まると通るのゆふ

なまめく浦乃名を秋のまら

堰めく

さしはさう大草れ紅葉と落葉をう

長崎めく

三國のまらけり秋は少きまら船



冬之部

いひ控をまゝや墨筆かこれり  
たけしれまゝとて来りたての葉が

筑紫の古郷へ海を初まふ

古竹へ春らぬたれ葉衣のたよ

傾けよ寝るハ幡たてに腰中

立炭を、あくのそと残はふれ

茶の湯めく當坐

冬よりし香たけり流雪のたけり葉が

少ふ心こころの葉に揚ふ雪のま

巨艦と伏見也りるま乃名

庚申待

七名小ちと一とるまき侍

伊勢めいせいふあわく

しよあや何勢神立乃雪吐友

遠中を申きふらひあ

雪ふとめ袖ふ拂ふ結賃か

雪文所めく

書ころるははとの葉積り雪吐意



正直乃かろ梅や白きいお霜月  
冥加あらせ玉のしらきてふ神代三寸  
乾々くハ豆板めくもさくあられ  
雲多沙や風ふを舞ふも浪花橋  
りふ唱ふ佛の市名くま子子  
此日の顔なるとち年忘とそ一折せふ  
いつのく十日のちとそくさるる夾  
又し年しとまららぬうとあらは  
天明七年丁未春

梅翁發句後拾遺 六十四章

春之部

梅や先仁徳乃御代祈徳夾  
蓬萊の山いふ紀中たろのや  
書ろ老やととと一筆笑やま  
年とけてぬけりく夾よ又  
山乃端も此世間の世留おまも  
伊左の初陽うとま今大お  
世よやくまの風体一夜乃春



吉宗よ大は事夕陽いまま残人の雪

南無天満大事乃本也梅れを家

きろくく寂いのいれ字をくは雁

京と京と誰のいををる花乃陰

宇治真聖寺小松

清坐らねと茶あう一何ろく今似

仁和寺のむとらん

みより野や人丸時代お室乃茶

輕覺亭みろく三吹せし

浪義智るう口梅くを家徳友

十人の才花小遊小野山う那

花不吹曉風残念付時なを

筑前城下麻久くくてあおめせし

不乃教やむしふかをら思ふよあふ

江戸樓雲助となむ花をけを

櫻塚山素盞烏尊奉納樓万句

急しそとむし二里一肩横ノ塚

須麻寺のあ糸はも河まいうる横ノ調

飛弾八景乃内上野夕照

下照や小松むら立岡はし



夏之部

琵琶和琴摺鉢乃音保中き次  
從身我やき附合うりやとて起る

在所

杜宇子厚少笑とて登向ハ好き

雨の初まると

志とらそむ弘法うけのゑ子親  
親竹乃茂きとてとる也今以  
東寺瓜や南からふむいと行

波乃石徳布きれも此汗ぬよ  
まきみほや下川原上き酒  
涼風の初合徳間や從う度ら

秋之部

又月やめを多くとじて海を舟

ふりよとてふるふ

舟便小やらん舟ら老とてより秋  
心とて親仁やとて侍やりの星



かけ踊の座せや久を去報の絲

次乃乃浦也

稲は言も通ふや光侍須摩徳氏

淡路島旁のまういも免未也

きり乃海十いまや祿の代島也

再案

玉なをせ侍新島や六き寄の海

長途小倦一森さあ

夜も長の旅森や侍あもら海くら

ま川やし事きく内う垢離の落

こもまろうやまははけてをんま秋

落ふ起とうはか馬一や女節は

笑うふ一本ノ一本浪小舞のあ

國民乃婆ふなひく秋田が

脚くおまひお地一隊しまたをこ

まき出やまんもまらめあまら夢

ふるあよ共く喰さかしく也

飛弾八景の内灘面落雁

玉不系もやめてまのるを乃らん急



山里とよむくまの鮎一種うま  
其身のまは山菜厨の種さうのり  
風や秋ふ里飛出らるる鹿乃皮  
月今宵よしのぬ羽子と宇宇うま  
医師乃もとせし

とま友やとつて公の乃宿北月

お庄の遊見よみく

たまきとやあはし乃同よの海ま  
江戸向のらうくしきけ童田娘

あふふ木練のふ乃くろ春左社也けり  
河内市所の大注麻柳といはれり

### 冬と部

京へたふし書はくまともかき月  
はまきり徳茶の金や羊たふもと風

大坂めく換授

なまらけりまは遊んま依程の浦は冬  
さかん休やあらまき松系酒乃かん



皇都知川や越くちんより河に馬

くくく見たりし人ふあひく

おんやひのえは是はとら乃左衛

伏見をめて京衆を出令

ちうふとも帝衣をよひを都風

京都の風俗をちと合人

又 阪中室よりそ北ふ我ころ青山

文化二年乙丑仲春前集校正

梅の羽發句後拾遺

四時混雜

三足乃ほらやさし大は礼年月日

此句ハ寅歲寅月元日寅の作なり

都のまはるるハ性もかへるもさかぬ

手はくころのくなく正体か

花ふ斗樽皆重くまこ有さ満也

木叶葉さ乃帝子や知らく申く嵐

は雨子入湯せし子あはるふよとそ

清も雪おとし七宿ハ有馬や



西山家連誹系譜



西山家

代攝天満ニ住シテ連歌家相續ナリ

昌琢門  
宗因

忘吾齋  
向榮菴  
有芳菴

初學肥後ノ釋將寺豪信法印ノ師トス

宗春

昌察

昌林

現昌林  
同宗珍

江戸誹諧傳系

梅翁

始ノ一幽後ニ西翁又梅花翁又野梅翁世ニ知ル梅花ノ一章ヨリ此翁ヲ誹諧談林ノ祖トス  
天和二年壬戌三月廿八日没歳七十八葬大坂西寺町西福寺

西雀

井原松壽軒 攝住吉於社頭獨吟二万三千句  
興行夫ヨリ二万翁ト号 元禄六年癸酉八月十日没歳五十二

才磨

推本狂六堂別号舊徳始ノ谷松笠軒初學、西武門ニテ則武ト呼又西丸ト改ム後梅翁因ニ松壽軒ニ從ヒ故アツテ上ノ文字カユ元文二年丁巳正月二日没歳六十二葬大坂西寺町西福寺  
豊島有紀堂 始ノ才尾 享保十二年丁未二月六日没歳四十九葬江戸谷中大雄寺

佳風

逸志

笠家致曲庵 始ノ半局菴其頃ハ江戸點者諸流一列ナリ此翁ヲ以連名ノ卷軸トス 延享四年丁卯五月廿七日没歳七十三葬江戸淺艸田原町報恩寺中高徳寺



舊室

笠家活、坊後活井始、鰐糞江戸點者  
汎ヲ別ツニ及ニテ宗因汎中興ノ筆頭ナリ  
明和元年甲申十月廿日没歳七十二葬江戸築地  
覺證寺  
點瑟 没ス年月不詳

尤簾

笠家古道 故有テ退席ス  
安永八年己亥十月  
廿三日没歳六十六葬  
江戸上野山下啓運寺  
尤簾 笠家幽雲齋始メ挑義師没後素外ニ屬シテ  
師ニ以ス寛政五年癸丑  
五月廿日没歳六十五葬  
江戸淺州樵寺

蒼狐

小菅柳前齋 始メ笠菴舊犬菅神奉納獨吟  
一日五千句興行五千堂ト号 明和二年丙戌十月  
六日没歳五十五葬江戸駒込徳性寺

良雨

没ス其時シ同ロサレハ年月不詳

沾涼

北東巴菴呀縁有テ菊岡沾涼カ名ヲ継天明三年  
癸卯二月二日没歳八十五葬江戸増上寺中昌泉院

萬丁

老後甲州ノ故園ニ終ル

眠牛

増田匍匐菴 明和八年辛卯二月六日没歳五十三  
葬武州糟壁驛成就院

五種

足高梅鄰菴 安永八年己亥九月二日没歳七十六  
葬江戸小石川一音寺

寶馬

始メ吉成萬歲洞一タヒ来爾ニ属シテ又臺ヲ開蒼狐  
没ス時ハ旅ニアリテ其期ニ逢ス後素外来爾ニ乞テ  
一列ニカヒ其親族ト譏シテ小菅ノ姓ヲ継シメ先師ノ例ニ



倣テ奉納獨吟一日五千句興行ヨリテ後五千堂号  
寛政十年戊午二月十九日没歳七十二葬江戸駒込  
徳性寺

現  
素外

谷一陽井别号玉池又三化蒼狐終焉望テ一汎事ヲ  
攸之祖翁傳脉口授残りナク道正統ヲ譲リ與テ繼シム

津富

島妍齋别号君山蒼狐没スノ刻未タ凡ク免シ  
ナシ素外ニ属シ學ニテ其傳ヲ得テ文臺ヲ開ク  
ヨツテ素外ヲシテ師ノ如クス寛政九年丁巳十二月  
廿一日没歳六十七葬江戸今戸慶養寺

花縣

山内春秋齋 寛政十二年庚申閏四月七日没  
歳六十五葬江戸麴町真法寺

木丹

常生白菴 天明七年丁未正月十六日没歳  
四十九葬江戸下谷廣徳寺中圓照院

現  
壺外

乾一龍井别号峻谷

素健

神取力陽井 文化元年甲子八月四日没歳  
三十五葬江戸深川万年町玄信寺

現  
規外

洛一東井

九井

太田五耕堂 享和二年癸亥六月三日没歳  
七十葬江戸下谷海應寺



髮

貫名舊波菴 寛政九年丁巳七月十日没歳七十二葬江戸青山千駄ヶ谷仙壽院

現 得兆 得器ノ婦妻ナリ素外ノ直茅ト成リテ印墨ヲ免サレ号与方圓井

現 得器

島方圓菴別号古鉢近來痞痲不事有ニヨリ素外ニ告テ柶隠シ業ヲ心ノ終ニス

欄舟

島龜溪菴 寛政十年戊午十二月十二日没歳三十七葬江戸牛込圓福寺

五世現 立志

関青松菴師得器其初ハ立志ノ門也志没シテ後津富ノ門人ト九故ニ我門人雨雪ニ立志ノ名ヲ継シム

現 古梁

文化甲子ノ秋前ノ立志ノ勇立匠立圃ノ側ヲ立ニ事ヲ器ニ云フ仍テ其意ニ任セ其派ヲ立志ニ興立サセシム

黒部一圓井師得器思所アリテ素外ニ属セシム依テ素外ヲシテ師ニ以但席ヲ立ニハ規外カ次ト

器觀

島不洙菴享和元年辛酉八月十九日没歳五十葬江戸増上寺中林松院

現 白英

山方一鶴堂

現 得友

岡益菴

現 李門

田島菴



現  
一 芳

島陽秀菴

三世現  
左 簾

笠東雲齋 始々燕志門社来二世左簾没後  
寛政五癸丑八月素外ニ属シテ左簾三世ヲ継外ニ  
道ヲ學テ師ノ如クス

萬 成

笠孤雲齋 寛政十二年庚申正月三日没歳  
五十一葬江戸三田綱坂下齊藏院

現  
社 来

井 遙雲齋

現  
井 器

伊藤九洞菴 師没後得器ニ属シテ師ニ以ス

右之外梅翁之支流雖都鄙多唯當流  
之舉一系而已

文化二乙丑春



先の中々梅翁後句集成を中追加  
拾遺追々印行あるに又後拾遺を加え  
前集の誤りを正しむるをも悉く云を將  
古今法序小難波津安積山のと云塔を  
欲乃父母より玉書ありての春徒を  
林の浪花をむむ乃の癖を祀譜のと云法  
形やとあせらむ右集法をよみて小四時の稿を  
題せし後句を録しむるにのう神代



まのしづめさあ乃母風流乃道を物  
をて此書と一流萬梅とも号するもの。  
夫より文化の母音大の古書とあ家  
へん神田玉池七十二翁谷素外  
のま

門人

乾壺外書

誄諧一流萬梅

春之部

梅

植かて根あらもより一救の梅 壺水  
梅をてくふかや月乃をつ就 素磨  
はた東風小向く漕や梅ん松 亀長  
肩衣ハむらうとらとや年始人 亀龍  
薄月やさらの梅も雪は透間 涼山



むせり小札赤き書よ六段人衣 素徳  
六世折のり此日の所路の梅 沂水  
赤日の梅や見る眼もかく鼻も 千枝危

白梅

薄小かくも赤き枝をの白梅や 冬央  
花をよ来へ貢りも言は梅は色 素秋  
雪の雪今去ら梅の意くもり 龜辛  
梅白く鳥居は味し庭屋一り 文賀女

去ら梅や門は遠いせぬ夜の形 文榮  
白梅や目も身の清た神乃坊 素琴女  
白梅や雨存一際乃朝氣松 素玉  
赤ハ梅紅らも梅ハ雪も白し 琴志女  
朝夕明てももれも思ふ梅ぬり 其葉  
白き雪の解る中も止め思ふ 仙鳥  
梅白く俗乃月もさく美人もや 疎影

一重梅



来りてあはれし梅の香しき人梅 冠専  
御多しあはれし人梅の香しき人 吳龍  
生梅もあはれし人梅の香しき人 素隣  
さげくし梅の香しき人梅 仙禽

八重梅

まはらぬの梅やまはらぬる白き梅 如水  
梅の八重小蝶はひやくの梅の香しき人 雀  
梅の八重小蝶はひやくの梅の香しき人 霞外

红梅

深き川にさくらとてはまき紅の梅 龜文  
红梅や雪よりまきり明らけ 外來

混雜

うきよの梅さくらや谷の梅 舟子  
梅ありし所は梅乃隅法むめ 桂我  
望川を舟乗りや梅見ゆふ 志連  
きん切小枝移り梅をう梅 采外



組香乃若とも雪の梅とよ  
 山里の雪野や庭小梅一本  
 酒酔れけりのおも梅おと  
 白をせよ梅不出茶屋山吹七  
 醉鯨七まことほる也む免る西  
 人日や夕ふを存を母の笑  
 月の夜やる近き梅七香小徳  
 縁日乃湯多ふ袴の梅見せむ  
 折出て梅小佳けりりるし舟  
 已禮  
 素周  
 醉笑  
 遙瀬  
 素后  
 操舟  
 昌舟  
 得和  
 如泉

礼修小当府先一首門乃む免  
 百姓乃湫音もほし細徳梅  
 門形小根返らせけむめの娘  
 むめり香や幸下司徳一寸戸  
 陽を既小梅徳いりる人をも  
 去来もこのまじと徳も子梅寒  
 梅う香や細おまけけり浦日和  
 寒いふりふもけり異くも娘の梅  
 菊を焚く如くおもるるい雪は梅  
 史山  
 以徳  
 質重女  
 雨簾  
 可充  
 春瓜  
 原路  
 素朴  
 百我



ちるや梅滄乃秋吉世垣隣 金馬  
 雪解く龍より梅の白い糸 曉柳  
 梅小風中からむや糸乃とくす 素従  
 筆を番もまけしこの影の梅 従一  
 はくや梅と朝霧と日の白い初 素克  
 总初む心流る乃梅小夾小袖 東林  
 雲小垂をくらふ山や梅一本 沾芸女  
 見体もくく大かこの梅先老来 素外  
 むめの花流るや二月年流る 吳御

梅一輪河中央小は香の何らハ 廉富  
 滄梅乃武も氣さるをな梅 崔郎岩槻  
 よい娘と世のいさるや雪の梅 五計全  
 去ら梅ハ雨の中なる月夜外 己禮  
 まも香小自の梅を雪徳園 寛之  
 月や何ら如梅やあらぬ松の隙 操舟  
 梅白く夜ハと年火を背けても 奉行  
 雪降るに梅白くを思ふ 藩山  
 梅心く鄙乃をんあも二月と 分香



残る雪を欺く雪との梅きりし  
侯得共

去ら梅や斗停亭の暮る目よ  
夏更 雨外

面白やしむる世神は梅  
赤尺

早と少の梅は去らむや  
赤克

きく梅やちりく雪のふる梅  
秋策

梅はくき解てり  
花慶

旅人まき草をよし  
亀山

地不穀の白梅よき  
田且

心梅やま習ふまきア  
岩槻 禊子

月薄くも赤はてはし  
鎌倉 英富

芦の倉は伝孫小室  
奇峰

魁ハ花もうも  
赤兆

梅小赤風も  
意好

笛もまき一  
壺天

はくらくら  
社時雨

ハさ梅乃  
赤文

旅りくちるも  
春舩

八重梅や  
赤梁



蒼きつら香も溢るしハまのむめ

起白更 大舟

年も八まおらあかりや老乃梅

鷹羽

飯室をもち得て笑や梅六守

汁漬

红梅やこまハ本年をあら新瑞

何来

勝心く香ハ確くけんの梅紅

素搏

红梅やゆくささみ酒乃いろ

鯉魚

とまなぬ小咲をや梅の色佳し

江又

お梅や唐の子ゆふ家乃定めり

藩山

红梅や唐島もたのふたう咲

仙里

红梅ハまき伊勢妙有能来乃使  
お梅やまの志らきう後徳庵

中冥

孝行

松と心後乃月日や梅の内

立圃 立志

夏之部

梅實

實も粉く丹梅乃えの鉢乃梅

錦車

梅の實は又一花やおふ紅粉

一鼎



青梅

青梅や 日向の果見を 輝し行  
 外來  
 青梅乃 日向の果見も亦 南枝より  
 蟹水  
 青梅の 魅花を 吐き 春乃池  
 亀長  
 青梅 東風や 実を 如く 今こそ 青梅  
 霞外  
 あを 梅や 心なを くらげ 春相の  
 仙會

混雑

斜 ときむ ぬや とも 家又 実の時 七  
 寛之

梅の 実 色は 青く や 梅は 早 なる 好  
 三原外  
 梅の 実 七 石 小 なる 好 花 梅 也  
 嘉慶  
 梅の 実 乃 七 多 小 なる 好 梅 雨 の 日 也  
 長徳  
 花の 実 乃 七 多 小 なる 好 梅 雨 の 日 也  
 存留書  
 賣 乃 七 多 小 なる 好 梅 雨 の 日 也  
 嘉慶  
 梅の 実 乃 七 多 小 なる 好 梅 雨 の 日 也  
 志夕  
 實乃 七 多 小 なる 好 梅 雨 の 日 也  
 東林  
 今や 實乃 七 多 小 なる 好 梅 雨 の 日 也  
 岩根  
 在泉



実や梅の足足しけし小冷や千の  
 貨又小梅やむめの実のりり年  
 青梅や木のり陰乃暑うらに  
 青梅や名のほくくすくすのり  
 あけむしやむすのりしハ調子  
 色せしと紫の思まふ梅のまきけ  
 春ハ花なりしハ梅は青少信  
 青梅の思ハりやあし毛虫も  
 梅女らをもしハ今も実のりり  
 英富  
 嘉舟  
 可忍  
 春瓜  
 嘉后  
 都舞  
 崔例  
 以德  
 得和

梅新くまき葉かくまは早月夜  
 むめきく〜あよまよのふハ  
 まよ〜花とまき梅を  
 梅の真は青〜ハ中  
 梅の思は清のまき梅もふや  
 梅清やまふ存あしハは  
 又まら〜まやまきめの  
 けり〜日ハ梅のりり梅出る  
 百我  
 信  
 多  
 調布  
 何来  
 志連  
 花丸  
 香



秋之部

梅紅葉

来やむらしきなるに梅紅葉  
 崔寧  
 空しくしほゆきと梅紅葉  
 嘉登  
 花やほしき花も実も梅紅葉  
 沂水  
 丁を今も梅紅葉や梅乃初紅葉  
 仙鳧

混雑

梅紅葉天の葉は来小まき色  
 侯得  
 うしほの来むらしき梅紅葉  
 不朽  
 際も今も一葉の葉梅紅葉  
 高峰  
 侍小来をいせしむしりみら  
 美兆  
 宗任も何れもよまむ梅紅葉  
 嘉舟  
 紅心なりしむしり梅紅葉  
 春船  
 輝も又さうりを見せつ梅紅葉  
 大舟  
 紅葉の春も葉も梅紅葉の秋は  
 調布  
 西行乃もさしり梅紅葉  
 田且



花小実より赤きハ孫也梅の紫 可恐  
 赤ハ根よりうつろふ梅の赤も外 厚路  
 伊達にやほし老てのうへ徳梅の紫 江又  
 深より赤き葉も赤き梅の紫 雀海  
 赤ら梅の赤も梅の赤もせき 赤外  
 梅も赤し赤の赤もく深きなり 秋策  
 赤も赤き又一はり梅の赤も 夷逸  
 赤め紅葉の赤の赤も眼も赤も 仙里

冬之部

帰の花梅

かこささく中ふま陰梅四五揃 如水

冬之梅

咲くまの梅あり神の留守社 亀幸  
 十りの今と赤き色とはくや梅 文賀安  
 豊清く梅の赤も梅の赤も 涼山



寒梅

寒梅の甘いきりや雪みくら  
 錦車  
 寒梅や一途にやしの花はぞ  
 亀文  
 空梅や冬とそそえぬ家の庭  
 冠妻  
 空梅や一刺毛のほろの隈  
 其葉  
 其葉

冬至梅

谷も空と一陽未復を至梅  
 冬央

夾合む白いや感了るら梅  
 袁秋  
 冬と空ははなれ梅はみよはし  
 袁奮  
 陰中よ夾乃其意や梅一ツ見  
 文榮  
 冬と梅は出や陰陽の侍示杭  
 呉龍  
 空の陽はからて空くやみ至梅  
 琴妻

早梅

早梅やさしと寂き花くらり  
 素玉  
 梅厚し夾まうと教を出さぬら  
 一陽



梅をやし侍子に白く如くうら  
早梅や仰芝の影小功徳の  
疎影  
一枝危

混雑

飛つとほくかも神乃園の梅  
短氣とや来とやいとむきの梅  
東風ととも吹ぬよいかき徳梅  
そも明と見えや侍子小梅の氣  
落葉しては梅の隙流し道なき  
史山  
原外  
裾子  
賀重  
多々

空梅やまこやもろ徳梅原  
空梅やそそ花の床のかさり物  
寒梅や明星跡る惠此上  
かんとふと見れば空梅も志まかり  
空梅やり花紫の中小大夫丈  
空を出し梅小進く日向のふ  
たまきおて暖やこの空は空の空  
冬に梅枝も日脚も伸るや如  
冬に梅さくや一陽非情とる  
舟子  
春深  
壺天  
夢胡  
従一  
花丸  
夷逸  
社時雨  
親魚



冬まで梅小一脚よりむ日や 喜外  
 厩にそく見事いハ咲くを冬分梅 申外  
 冬至梅小分や佳境乃道一尾さ 素天  
 少一尾く分梅冬分の梅う意 丹丘  
 白ハせりはる陰繁ハ梅の陽 花齋  
 妙見をまつ冬玉乃梅や星 志夕  
 梅厚し梅の梅うまつら大根 素晴  
 早梅小日満こんせ川さの相立 素文  
 子梅の気集らん法一雪一程 廉富

高季人を梅も美ふや堀乃意 金馬  
 見初より梅うらまをを仰光うら 暁柵  
 年乃肉ハ通ふ意ハ梅う分係 五計  
 室中の梅や法さそ日たきえ 在泉

四時混雜

朔且り冬玉めくし梅報 素外  
 红梅や旭そくおきき圍乃意 左簾  
 早梅の斛や美きゆ此中 壺外

江戸俳談林



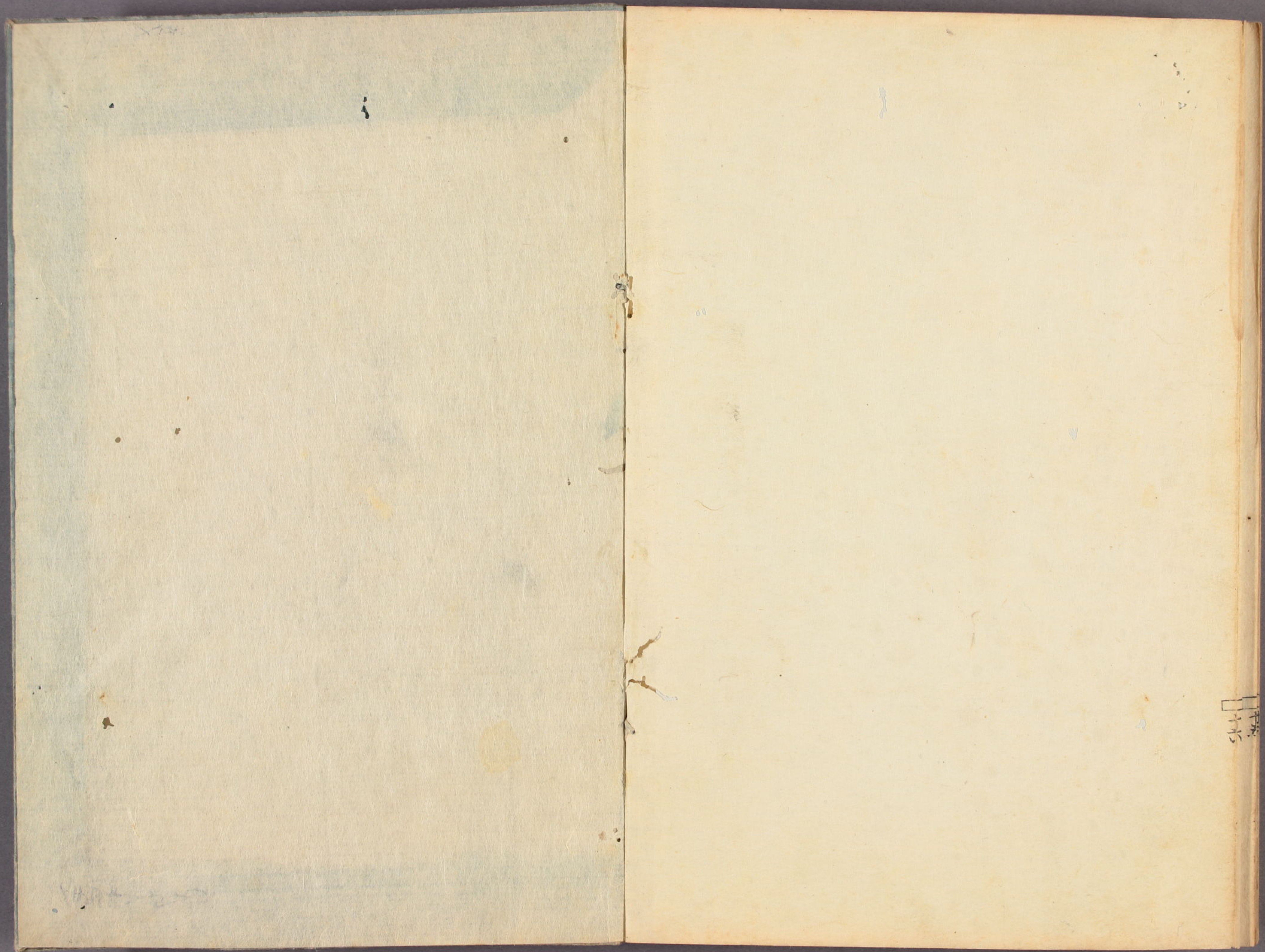
冬もつゆと梅はくはるの人通り  
 規外  
 女もつゆのわいの内よ室ろ梅  
 古梁  
 今もつゆに誰れきら梅伊勢の家  
 白英  
 日と月と雪とりのく梅はく  
 得友  
 早梅のかつらら室し松がく  
 李つ  
 咲了けり取ふ年の初まく梅  
 一芳  
 早も梅はくはる室の梅一本  
 井岳  
 梅本厚もつゆに北面脊戸の梅  
 社来  
 梅はく青く実はくはるや梅の  
 女  
 得北

縁雀はくはる梅乃室もくはる  
 栖隠  
 得岳

一流万梅の詞をくはる小林を  
 あやうも言葉子梅はくはる  
 室申はる故くはるおまはる

於年く文はけ室もくはる梅  
 素外





平  
本



